

広域計画等フォローアップ委員会
第1回「人の環流とアジアのハブ機能」に関する小委員会 議事概要
(意見交換部分)

日 時：平成30年10月4日（木）10：00～12：00

場 所：関西広域連合本部事務局 大会議室

参加者：加藤委員長、大南副委員長、上村委員、新川委員（計4名）

1. 広域計画等フォローアップ委員会 小委員会について

(1) 設置目的

第3期広域計画の「広域連合が目指すべき関西の将来像」についての基本的な考え方、

- ・国土の双眼構造を実現し、分権型社会を先導する関西
- ・個性や強みを活かして、人の環流を生み出し、地域全体が発展する関西
- ・アジアのハブ機能を担う新首都・関西

を軸とし、今後、関西広域連合が目指すべき将来像とその実現のために必要な施策について、指導・助言を受けるため。

(2) 設置した小委員会

- ①「人の環流と国土の双眼構造・分権型社会」に関する小委員会
- ②「人の環流とアジアのハブ機能」に関する小委員会

(H30.6.5開催 第2回広域計画等フォローアップ委員会で承認)

(※上記の小委員会とは別に、平成30年3月12日に人の環流をテーマにした小委員会を開催)

2. 意見交換

検討項目：ソフト・パワーによる国際競争力の強化

【ソフト・パワーという概念を用いることに関する意見】

- 「ソフト・パワー」という考え方そのものは非常に理にかなっており、経済活動との両輪という点でも重要な観点を含んでいる。社会が成熟してくる中で、経済を動かすためにはもう一つの側面を同時に動かすことが重要。(加藤委員長)
- 自分の経験からいっても、これから必要なのは「ソフト・パワー」だと思う。ソフトを先に構築して、その上にハードを乗せていく。ハードを整備するときに、行政の出番がやってくるような組み立て方だとスムーズに物事が育っていく。(大南副委員長)
- 関西広域連合としては、ソフトの領域に、個々の自治体とは違う観点から海外との関係を見ていくことが大事。(加藤委員長)
- 広域計画として考えるには、経済の振興に結びつかないと「ソフト・パワー」にならないところもある。経済にどのような影響を与えるかを見定めないといけないが、関西の持

つ「ソフト・パワー」のポテンシャルは非常に大きいと思うので、どう生かすかを戦略的に考えるべき。（新川委員）

【ソフト・パワーの事例に関する意見】

- 中身が重要であり、コアなところに関西が持っている文化、歴史、思想、地域社会的な基盤などが出てくると、「ソフト・パワー」らしくなる。例えばヨーロッパの都市が最近やっている都市のルネッサンスや、文化都市という視点も考えられる。（新川委員）
- EUの文化都市政策は、なかなかいい。関西広域連合が文化首都ぐらいになれば世界から注目される。（加藤委員長）
- ヨーロッパには、世界「ポエトリー・フェスティバル」がいくつもあり、言葉に出して詩を吟じる伝統の中に強い「ソフトな・パワー」がある。昨年、大阪の企業に協賛いただき、世界から詩人を招いて「ポエトリー・フェスティバル」を開催した。中国が最近力を入れて世界から詩人を招いている。（上村委員）
- 神山町では、世界中からシェフを呼んで、地産地食をコンセプトにして料理をふるまってもらい「シェフ・イン・レジデンス」を開催したところ、日本の食材に会いたいシェフが、安価に長期間滞在できるような場所を求めてやってきた。（大南副委員長）

【ソフト・パワーの効果に関する意見】

- 「ソフト・パワー」は10年後に花開くものもあれば、20年、50年、100年後に花開くものもあり、成果を急がない方がいい。しっかり醸成していく必要がある。（上村委員）
- 文化的な活動と経済的な活動が一体化することで人が集まり、その結果としてビジネスが生まれる。（加藤委員長）
- 「ポエトリー・フェスティバル」は、あまり費用がかからない割に効果がある。マケドニアや、ルーマニア、アルメニアなど、詩が盛んな国との新たな環流にもつなげることができる。（上村委員）

【関西でのソフト・パワーの展開に関する意見】

- 高収入階層が集まるような仕組みだけを目指していると、関西という庶民の力が大きい地域で考えたときにあまり合わない。（新川委員）
- 「ソフト・パワー」の価値の使い方を考えると、世界との環流という視点では、産業や経済の振興より前に、どのように関西の「ソフト・パワー」に共感してもらうかという戦略が必要。一つ一つの文化活動や地域の活動を、官も民も一緒になって幅広くアピールしていくことが早道かもしれない。（新川委員）
- 政府が使っていた「ソフト・パワー」とは表現を少し変えて、関西らしいアプローチとして、人が環流するような仕組み、仕掛けとして使えないか。（加藤委員長）
- 人が環流することは、働き方と連動しているので、収入だけでなく熱意をもって満足度

を高めることが重要。SDGsは世界的に重要な姿となっており、そういうものを関西広域連合で打ち出す中で、「ソフト・パワー」が使えるかもしれない。（加藤委員長）

- 関西の「ソフト・パワー」の歴史的な土壌はとても深い。すぐにビジネスにならないことであっても育てていく土壌があったからこそ、いま企業に形を変えながら花開いており、これは学問や文化についても言える。関西は、すぐに収益にならないことでも一生懸命やる人が多いのは誇れる。（上村委員）
- 大阪の企業には、「やってみなはれ」と、ちょっと乗ってやるかという明るさ、人のよさがある。（上村委員）
- 新しいこと、しかも評価が定まっていないようなことでも、ちょっとおもしろそうだなと思ったときにそれを受け入れることが重要で、そういう力を関西は持っている。（新川委員）
- 若い人たちが住むのは難しくても、環流しながら関西の文化を味わったり、新しいインスピレーションを発揮して、それが表現活動や創造活動につながっていくと関西の価値を高めることになる。アーティスト・イン・レジデンスをもう少し関西流に、持続可能な形にして、人の流れをつくり出していく戦略も考えられる。（新川委員）
- すぐに効果が発揮できる経済と、効果が出るのに時間がかかる文化の両面を見ていく必要があり、関西広域連合が取りまとめられるとしたら文化ではないか。「ソフト・パワー」に力点を置いて、関西が1つの塊になって発信していく方法を考えた方がいい。（大南副委員長）
- 地域づくりとは、いろんな部品に人という要素が入って、それが原動力になっているいろいろなことを動かしていくこと。アートに限らずいろいろな可能性があり、それらが特色を持って広がると魅力的な関西ができる。（大南副委員長）
- これから増えてくるIoT、AI、ロボットなどに人間味を吹き込むのが文化であり、背景に文化があれば、西洋とは違うAIやロボットが日本で生まれる。その基盤をつくるため、20年後、30年後に効果を発揮する可能性があるところを育てることが、関西の将来をつくっていく。（大南副委員長）
- 地域の個性を生かしながら、その文化なり固有の資産なりをベースにしたIoTやAIが世界と競争する最も重要な要素になるかもしれない。（加藤委員長）
- アーティスト・イン・レジデンスは、地域の協力が必要だが、それほど費用のかかる話ではなく、人の環流にとって大いに可能性がある。「ソフト・パワー」戦略として、関西全体で取り組むことを関西広域連合が提案し、それに呼応する府縣市町村がたくさん出てくる、そんな図式が一番いい。（新川委員）
- 広域計画のベースを中長期的な観点で、しかも広域と地域、地区がきちっと連動・連鎖している構図をつくることができれば、構成府縣市にも賛同してもらえるのではないかと。（加藤委員長）
- 関西はお稽古事が、他の都道県に比べて盛んだと思われる。何でも習ってやり続けてい

く人も関西の強み。お稽古事を「ソフト・パワー」として注目してはどうか。関西には、大本山や総本社もたくさんあり、宗教も「ソフト・パワー」として存在感がある。（上村委員）

- ライフスタイルと、関西のこれまでの歴史的、文化的な蓄積をうまくつなぎ合わせると地域の強みになる。（加藤委員長）

検討項目：関西をどう海外に売り出すか

【海外事務所の活用に関する意見】

- 関西からの情報発信には、府県市が持っている海外事務所との連携が重要であり、こういう資源をうまく使いこなせば関西の魅力を発信できる。（加藤委員長）

【海外への売り出し方に関する意見】

- 関西をどう海外に売り出すかについては、地域と地域との信頼関係やつながりに着目してはどうか。「ソーシャル・キャピタル」という考え方がある。アジアを前面に出すとしたら、関西とアジアの信頼関係が生まれることでそこに投資が行われる。国と国との関係では難しいことでも、地域であれば、本来の意味での「ソフト・パワー」でのやりとりができるのではないか。（加藤委員長）

【関西の認知度を高める方策に関する意見】

- 瀬戸内国際芸術祭は、非常に世界から注目されている。関西でもこういったことができるのではないか。（上村委員）
- 瀬戸内国際芸術祭の会場になっている直島は、行政が予算を投入して広げていったが、私たちが神山町で目指したのは、直島と真逆のやり方。先行事例とか成功事例とかを最初からイメージして追いかけるのもよくない。地域ごとに独自性があるので、その人たちに合ったようなものをつくり上げていく必要がある。（大南副委員長）
- アーティスト・イン・レジデンスは、最初の言葉を読みかえることによって、多様性に富む地域が生まれる。読みかえたものを広域連合の各府県の中で展開するのも一つの方法。参加した人たちが、その地域の情報を自分の国へ持ち帰って情報が広まっていく。（大南副委員長）
- ウェブサイトによる発信で重要なことは、ありのまま、あるがままの情報を出すこと。装飾された情報が出ていった結果、ウェブサイトで見たものと現実に見たものが違えば、その分その地域は価値を落とす。ありのままの情報を出すというのは「ソーシャル・キャピタル」の根本原則。（大南副委員長・加藤委員長）
- （IRを活用して関西の認知度を高めるために）IRを核としながらその利益で文化のこんなにかいいことが花開いたとなればいい。新しいまちづくりの中で、関西の「ソフト・パワー」を結集するようなものが出せばいい。（上村委員）

- IRについては、首長により温度差はあるが、展開することが一つの方針になっているので、ぜひともこれを位置づけて書いていただきたい。（加藤委員長）

【人の環流のためのソフト・パワーの活用と価値の共有に関する意見】

- 若いアーティストの中には、自分たちの移り住んだ町をこうしたいと思う人が増えており、価値観が変わってきている。（上村委員）
- 関西には芸術家を応援していく歴史があったはずなので、それが格好良いと思われるような、現代版メセナマインドが定着しライフスタイルになると、いい「ソフト・パワー」が醸成される。（上村委員）
- アーティストも含めて、若者や特定のことに非常に興味のある人たちが環流していく仕掛けをどうつくるかが重要。（加藤委員長）
- 暮らし方とか生活文化、あるいは生活経済的な側面など、日々の暮らしが持っているものを丁寧に見ていかないと「ソフト・パワー」にならない。関西には歴史のある都市があり、都市の文化に魅力を感じ、それを生かそうという人たちもたくさんいる。実は種が山ほど転がっているのに生かせていない。（新川委員）
- 人の環流や発信を考えていくと、おのおのの価値を共有できる場を作り出すことが重要。関西圏としての環流の手法をもっと洗練させていく必要がある。（新川委員）
- 産業振興も、顧客や支援してくれる人と、目的や考え方、利益を共有できるかがポイントになる。そういう方向で企業支援、あるいは海外の投資家や海外企業の関西への呼び込みを考えていかないとうまくいかない。（新川委員）

【その他の意見】

- 「ソフト・パワー」は次世代の人材育成にもつながる。AIやIoTによって、産業構造が再構築されていく中、AIとの共存やITを使いこなすには人間力が必要。リベラルアーツをしっかり踏まえつつ、専門性がある人材を育てるために、文化の持つ力は非常に大きい。（上村委員）
- 今までの日本は、ハード面では非常に進んでいたのに、それを生かす「ソフト・パワー」がなかった。今度は逆に、ソフトで勝負できるような日本であったり、関西圏であることが必要。そのために、「ソフト・パワー」のベースになる文化を育て、触れられる機会をつくり、その上に「ソフト・パワー」を構築するような考え方が重要。（大南副委員長）